The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	GLOCOLブックレット04　はじめに
Author(s)	上田, 晶子
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 4, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48285
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

上田 晶子 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

本書に収められているヨハン・ポチエ教授（ロンドン大学東洋アフリカ学院）による論文は、2008年9月に大阪大学で開催された「人間の安全保障教育研究コンソーシアム2008年度研究大会」における同教授の基調講演がもとになっている。

ヨハン・ポチエ教授は、過去30年間にわたって、ルワンダやコンゴ民主共和国などアフリカ中央部をフィールドとし、草の根のレベルでの食料安全保障についての人びとの視点や、食料政策、そして土地改革などの問題について大変精力的に研究をしている。そして、代表的な著書のひとつである『食糧確保の人類学：フード・セキュリティ』や、*Re-Imagining Rwanda: Conflict, Survival and Disinformation in the Late Twentieth Century* によって日本でもよく知られるアフリカをフィールドとする社会人類学者である[1]。干ばつや飢餓からの回復過程、メディアによる紛争の表象、そして避難民の視点からみた人道援助を主な研究テーマとし、人びとが危機的な状況をどのように理解しているのかという視点が研究の重要な核になっている。

ポチエ教授が研究対象とするアフリカ中央部では、ルワンダで独立前からの紛争が内戦に発展し、1994年にはジェノサイドが行われ、また、コンゴ民主共和国（旧ザイール）では、内戦により膨大な数の犠牲者をだし、国連の平和維持部隊が展開している現在でも紛争が継続中という、人びとの安全が長年にわたって危機にさらされている地域である。本書に収められた論文で取りあげられているコンゴ民主共和国での紛争も、最も激しかった東部地域において、1996年から2007年の間に約61パーセントの住民が避難を余儀なくされた（本書23ページ参照）、多くの市民を巻き込んだ紛争である。ポチエ教授は本論文のなかで、詳細な民

1　『食糧確保の人類学：フードセキュリティ』山内彰・西川隆訳、東京：法政大学出版局、2003年。
Re-Imagining Rwanda: Conflict, Survival and Disinformation in the Late Twentieth Century, Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

族誌のデータをもとに、草の根の視点からの紛争の理解を試み、そして、政策や援助機関の方針にそれらがどのような意味を持つのかを提示している。特に、食料の生産、流通と消費、土地所有、性的暴力と子ども兵といった問題に焦点を当てながら、人間の安全保障の名のもとになされる介入が、これらの解決に効果的になされるために、何が必要かを論じている。

本論文だけでなく、ポチエ教授の研究の多くに共通してみられるのは、政策や援助の方針といった実践へのコミットメントである。『食糧確保の人類学』のなかでも、政策決定者に効果的に情報をあたえず、影響力も持とうとしないような分野には属したくないという趣旨のことを明確に書いている(第一章)。紛争やジェノサイドに巻き込まれ、肉体的にも精神的にも大きな痛手をうけた人びとの状況と彼ら自身の視点についての詳細なデータ、そして研究テーマについての幅広い知見に裏打ちされたポチエ教授の著作は大きな説得力をもつ。そして、彼は、このような研究の成果を数々の援助機関や政府関係機関と積極的に連携することによって、実践へと還元している。

ポチエ教授がこの論文のなかで指摘する援助機関の職員の地域社会全般への理解の不足は、紛争状態に限ったことではなく、平和時においても、筆者自身が援助機関で仕事をしながら感じたことであった。人道援助を含む援助業界は、医療、教育、法制度といった専門分野によって分けられ、地域の包括的な事情に精通した人材が育ちにくい状況になっている。ポチエ教授が指摘するように、共同体の内部は画一的ではなく、共同体を構成する人によって状況の理解や望ましい改善の方向が違うということをふまえて「共同体」を――そして、ひいては紛争自体を――理解することは、たいへんに重要なことである。そして、援助業界全体に、そのような草の根の多元的な視点を、その歴史的背景をも含めて理解することの意義がより一層認識され、政策や方針の中で具現化されていくことの重要性と緊急性を、あきらめることなく発信していかなければならないだろう。政策へのインパクトを視野に入れたポチエ教授の一連の研究は、その意味において研究者の役割のひとつを示しており、本論文も例外ではない。

最後に、論文中に掲載されている写真はオーブレイ・グラハム[2]

2　詳しくは、ウェブサイトを参照。 www.AubreyGraham.org

というフリーランスの報道写真家によって2009年の夏に撮影されたものであることを紹介しておく。